

復興支援活動の現況 ～支援から協働への変化で得たもの～

アイソトープ総合センター 秋光信佳

はじめに：

2011年5月28日、南相馬市の桜井勝延市長（当時）から環境放射能の調査要請を受け、当時のアイソトープ総合センター長であった児玉龍彦先生（現：東京大学名誉教授）が初めて被災地を訪れました。この時から、アイソトープ総合センターの被災地支援の歴史が始まったのです。私自身は、同年7月頃から南相馬市支援活動に合流しました。

私たちアイソトープ総合センターの教職員は、放射線管理区域と呼ばれる実験室内の管理された放射性物質の取り扱い、放射線防護、および放射性物質の除染については専門家でしたが、原子力発電所事故によって環境中に放出された放射性物質の環境動態や効果的除染方法については不慣れでした。限られた知識と経験をもとに、手探りで除染と被災地支援を行っていたのが実情でした。当時は比較的放射線量が高い地域に立ち入ることがあったため、防護服やマスクを着用しての支援活動を強いられました。真夏の暑いさなかに防護服とマスクを着用しての屋外作業は過酷でした。また、被災地には宿泊や食事のできる場所がなかったので、早朝に弁当や飲料を買いこみ、往復で700～800キロの距離を交代で運転しながら日帰りする活動を行っていました。肉体的にも消耗する活動でしたが、被災した現地の方々の苦勞を目にすると、弱音を吐くことはできませんでした。乳児を抱えたお母さんが涙ながらに放射能に対する不安を聞いたとき、私ももらい泣きをしながら話を聞いたことが今でも印象に残っています。

最初は南相馬市の支援のみでしたが、次第に他の自治体からも支援要請が寄せられ、浪江町、楡葉町、広野町などの浜通り地域をひろく支援するようになりました。後に、これらの自治体とは協定を締結し、組織的に支援する枠組みを整備しました。現在でも、私は、主に楡葉町と広野町の支援を継続しています。私たちの復興支援活動は多岐にわたりますが、その活動内容は別媒体で紹介してきましたので（文献 1-4）、この小文では楡葉町との連携で最近実現した連携ミュージアム事業について紹介します。この連携ミュージアム事業を進める過程で、私は「支援から協働」への変化という貴重な体験をしました。また、この連携事業の成功を支えてくれた復興知事業についても紹介したいと思います。

1. 復興知事業

2011年の原子力災害のあと、福島県浜通り地域では多くの大学関係者が被災地支援をおこなってきました。ところが震災から数年が経過すると、下火となる支援活動が散見されてきました。このようななかで、被災地の自治体や地元住民と強固に連携し、持続的に活動を行っている大学関係者の活動を支援するため、2018年度から文部科学省が学術研究活動支

援事業「大学等の「復興知」を活用した福島イノベーション・コースト構想促進事業」（通称：復興知事業）を開始しました。当時、私は檜葉町を重点的に支援していた縁から、檜葉町と連携して復興知事業に応募し採択されました。この復興知事業への参加が私の活動のターニングポイントとなり、大学内や大学間の連携につながって行き、後に述べる連携ミュージアムに結実しています。

復興知事業では、大学の有する多様なリソースを復興支援に活用することが求められていました。大学の最大のリソースは「ひと」とであるという思いから、わたしは大学生・大学院生を浜通りに引率して、地域との交流等を行うことにしました。当時は放射線量の高い地域が多く残っていましたが、事前に放射線についてしっかり勉強し、また防護対策も行った上で、大学生・大学院生と一緒に被災地で活動を行いました。一例を挙げると、留学生と地元の小学生との国際交流イベントを檜葉町で行いました。この活動は、参加した留学生の母国のスイーツを地元の子供たちと一緒に味わいつつ、国ごとに特徴のあるスイーツをきっかけに国ごとに異なる文化を理解し合うイベントを行っていました。このイベントで留学生が地元の子供たちから日本の文化の一端を学ぶ様子を目の当たりにし、支援を通じて大学生や大学院生も学ぶ機会が多くあると実感しました。つまり、支援者と被支援者という固定した関係性ではなく、互いに教え・学び合う関係が成立することを目の当たりにしたので、もちろん、原子力災害直後の緊急時にこのような関係性が成立することは極めて困難でしたが、災害からの復興フェーズが変化するに従って、支援の関係性が変化していたのです。これは、Neal（文献5）など多くの研究で示されてきたことですが、私はフェーズ変化を実体験したのでした。

復興知事業を通じて、福島復興に取り組む多くの方々と親交を結ぶことができました。また、上述のフェーズ変化を含めて多様な学びを得ました。私自身が得た学びを広く大学生にも紹介したいと考え、溝口勝先生（農学生命科学研究科、教授）とタッグを組み、2020年度から本学教養学部で「福島復興知学」を開講しました。この講義では福島復興支援の最前線で活躍する方々にそれぞれの体験や経験を受講生に語ってもらっています。さらに、この講義の内容を編集することで「福島復興知学講義」という本も2021年に発行しました（文献4）。今年も復興知学講義の本を片手に、駒場生と一緒に浜通りで学びを続けています。

2. 小さなミュージアムの物語

浜通りで活動するなかで、震災から10年近く経過するとインフラの復旧がすすみ、十分とは言えないまでも住民帰還も始まっていました。しかしながら、地域の文化や芸術の復興はやや立ち後れているように感じていました。このような問題意識を共有した早稲田大学の松岡俊二先生とともに私は国際芸術・学術拠点構想研究会（A&S研究会）を立ち上げました。この研究会を開始した直後にCOVID-19パンデミックが始まり、慣れないオンライン会議などを活用しながら、科学、芸術、文化について多くの方々と語り合いました。そして、約1年に及ぶ研究会の成果を国際芸術・学術拠点構想（A&S構想）として提案するに

至りました。この提言では、福島原発事故の教訓を踏まえた学際的な研究教育、および地域社会の災害復興や芸術文化などの博物館・ミュージアム部門との関係性を重視した新たな「知の拠点」の整備が急務であると提案しています。

A&S 研究会を通じて、私は数多くの芸術関係者や博物館関係者との知己を得ました。また、榎葉町の方との交流がきっかけとなって、これから述べる小さなミュージアムへとつながっていきました。

始まりは、何気ない会話からでした。

2018年のある日の昼下がり、私は榎葉町で行われた放射線対策に関する会議から帰宅するためにJR常磐線に乗車していました。たまたま同じ電車に旧知の榎葉町職員・坂本氏も乗車していたため、どちらからともなく雑談になりました。その何気ない会話のなかで、榎葉町が設置している歴史資料館が地震で被災し、閉鎖されたままであることを聞きました。地域の文化に強い関心を持つ坂本氏は、歴史資料館の再開を模索していましたが突破口を開けないと悩んでいたのです。その話を聞いた時点で私自身に明確なアイデアは無く、その日は、ただ話を聞くのみでした。それからしばらくたったある日、東京大学総合研究博物館の運営委員を兼任する鍵裕之アイソトープ総合センター長（当時）から、「総合研究博物館では資料を整理保管する場所が不足しており、多くの貴重な資料が眠っている」という話を聞きました。この話を聞いたとき、私にあるアイデアが浮かんだのです。「もし、東大博物館の資料を榎葉町に移設保管し、東大の博物資料と町の歴史資料を合同展示できれば、両者の課題が一気に解決するのでは？」というアイデアでした。このアイデアを思いついた後、鍵先生を通じて総合研究博物館の三河内先生を紹介してもらい、博物館資料の保管状況について実情を尋ね、また、資料の保管状況を見せてもらいました。確かに、薄暗い部屋にうずたかく積まれた資料の山がそこにはあり、まさに資料が眠っていました。一方、榎葉町の資料館の被災状況もひどく、天井は落ち、展示物は破損したままでした。双方とも大変な状況であったため、両者を結んで合同展示するなど実現性が低く、実現に向けて気が遠くなる作業が待つと想像できましたが、関係者と相談してみると、私が思っていた以上に賛同の意見を得ることができました（と私が勝手に解釈していただけかもしれませんが）。この時期、被災地域では地域文化や芸術に対する機運が高まっていたことも我々のプランを後押ししてくれました（文献6）。さらに、復興知事業からも支援を得ることができ、プロジェクトが少しずつ進み出したのです。

まずは、役場関係者と東大博物館関係者の相互の意見交換から始まりました。双方とも課題は明確であり、何度か話し合うなかで、お互いに協力する雰囲気が生まれてきました。ちょうどこのタイミングで洪先生が登場しました。洪先生は博物館展示のプロフェッショナルであり、東大博物館の展示を長年取り仕切ってきた人物でした。洪先生とも展示のコンセプトを何度も話し合い、ついに、「危機と再生、未来創造」という方向性が生まれてきたのです。これは、地球が生まれてから、この地上では地殻変動や天変地異といった様々な災害が発生し、そのたびに地球上の生物は新しい命を育み、したたかに命を繋いできた歴史的

実を背景に、2011年の震災を地球的規模から捉え、そこから新しい時代の到来と発展を予感させるというコンセプトでした。地球と生物の歴史は総合研究博物館の資料が語り、地域の歴史と震災という危機を檜葉町の資料が語るという役割分担をすることで、相互の資料が有機的につながるコンセプトでした。

コンセプトが固まると、双方の資料をどのように組み合わせれば、我々のコンセプトをよりわかりやすくかつ印象的に伝えることができるかについて熱く議論を交わしました。このとき、町の関係者と大学の関係者は対等な立場で議論をすすめ、まさに、「支援から協働」への変化が起きていました。

しかし、我々は危機に遭遇します。2020年春からの新型コロナウイルスによる世界的パンデミックは、ヒトの交流を止め、我々のプロジェクトにも暗い影を落としました。さらに、2021年2月13日に発生した大きな地震によって、檜葉町に移設した東京大学総合研究博物館の資料が倒壊するなどの甚大な被害も受けました。しかし、「危機と再生」を標榜する我々は立ち止まること無く、歩みを進め、そして、2023年4月22日に、檜葉町×東京大学総合研究博物館 連携ミュージアム「大地とまちのタイムライン」がオープンしたのです。

我々がデザインした連携ミュージアム「大地とまちのタイムライン」は来館者とともに成長する博物館です。どういう意味でしょう？それは来館してからの楽しみです。ご興味のある方は、是非、お越しく下さい！

3. 終わりに

本小文では、2011年に始まるアイソトープ総合センターおよび私自身の活動を述べました。そして、多くの出会いと幸運に恵まれて、檜葉町×東京大学総合研究博物館 連携ミュージアム「大地とまちのタイムライン」の誕生につながりました。これまでの12年の活動を振り返って、研究者として大学で活動するだけでは決して得られなかった貴重な体験や友人を得たと感じています。近年、地域との交流が大学の教育研究にとって有益であることを認識されています。時には「書を捨て、地域に出る」ことが我々に芳醇な果実を与えてくれると私は感じています。

文献：

1. 秋光信佳, 福島第一原発事故への取り組み、実験医学、30、462-463 (2012)
2. 秋光信佳, 福島原発事後の復興に向けた今日までの進捗状況、薬事日報、3月号特集号 (2013)
3. 秋光信佳, 桂真理, 「放射性セシウムによるヒト影響:細胞レベル影響のトランスクリプトーム解析」、環境ホルモン学会ニュースレター、17号、2 (2014)
4. 秋光信佳, 「放射線対策と課題」、都市計画、2014年10月号、331, 7-8 (2014)
4. 秋光信佳, 溝口勝 (編集), 「福島復興知学講義」東京大学出版会 (2021)
5. Neal M. David, Reconsidering the Phases of Disaster, International Journal of Mass Emergencies & Disasters, 15, 239-264 (1997)

6. 秋光信佳、浜通りに芽吹く科学と芸術との融合活動、Isotope News、771, 54-55 (2020)